

「謎の喪失」

讀書メモ

平成二十一年十月十一日

各段落の要点

段落一

・現代の小説が謎を喪失し、魅力を失ってゐるのほろせか

小説家

近代小説史に遡って究明するべき問題

讀者

現代の社会生活それ自身のうしろの解明の鍵

・認識の機能の墮位の風潮

十九世紀中葉末以降

・科学の可能性に対しての信頼の失ふること

・やかては未知の領域が消滅しうるであらうという
信念が人々を動かす

・未知を既知としてゆく人間の理性に信頼する

←可能性をもつことを合理的と呼ぶ

段落二

・人々は未開時代から、いつの時代も合理的に生きては
きたが、今日は、萬事は解決可能とする意識が
現実を上廻ってはゐないだろうか

←情熱の冷却を結果する（「謎の喪失」）

・自然科学・哲学 以外の精神科学の分野において

あらゆる対象を合理的に組み立てようという信念
あいまに余地を残す現実

このやり方が大きいほど、方法論をもって
現実を選択し、また切り捨てる行をする

←
方法論が見事に完成し、能動的な序論のみで
本論らしきものも問さへ登場すること

人々は、科学の解決力への可能性に盲目的な信頼
かかり、現実の謎に対しては、なんとかくつて驚きの様
なう

謎を失う

科学者のみは、常に謎の脅威にさらされ続け
二十世紀に至り、物理学は、認識の不確実性
現実の不可測性に直面

量子論の登場

真の科学的態度

現在の不可能に直面して、問題を将来の可能性に
ずらしてしまつてはならない

現下の謎の克服からの務めあり、さうして
情熱と努力との存在するところ、謎は敵として
ふのれと主張してゐる。

自然科学と社会科学及び文学とは、

認識すべき対象やレベルが異なるために、
認識の役割も、方法論も異なる

マルクス主義の社会科学は、常に将来の可能性から
現実を見るという態度、これは、真の科学的
態度とはいへず、現下の謎の克服への情熱・努力を
欠くゆゑ、謎は失はれてゐる。

段落三

・ 現代小説の貧乏さ、魅力を失った

謎に直面した困惑を知っているから

・ 謎はあり得ぬという固定観念のいふはれ

驚く心を失った

・ 驚くやうな事態が起っても、説明にやまになり

説明しかないことは無視し忘却した



このことは、近代日本はより適切にあてはまる

(後進国ゆえに、欧米先進国の足跡をそのまゝ)

すべて見たほしの未来とらえてしまつた)

ヨーロッパ人の未来には、無限の可能性 (未来の念白) があった

近代日本は、前人未踏の境地に一度も踏み込んでゐない

未来は既定の一本道と観念してしまつた

驚くことを知らなかつた

現実にはついに謎として結局しなかつた



すべての合理的な説明のつげうる現実の貧困が
わいしい

・ 合理主義とは、混乱した現実を整理し、行動への

一歩をのみ出す積極的な意図

↓ Aの領域の拡大化



日本においては、つまり整理された現実のうち

埋没する無為の消極性に到達

合理主義者にしてオプティミストたる

錯誤 ↓ 近代化できつてぬちい

・ 觀念のみならず、現実も固定してゐる。

ヒューマニティそのものか固定

人間像が立体的陰翳を失つてゐる

決定的
因果の必然性
とほれてゐる
(進歩主義か?)

・ 自己喪失

ヨーロッパ人は神の前に「可能性の」前に 自分としての
人間像のあまりに人間的に「恥ぢる」
内なる權威の喪失

近代的な人間概念のつまへ、自らの封建性、自らの
肉体を遺棄してしまつた空虚。

自己内面の不可測なるものの存在を圧搾した

・ 現代の作家は、素材も理想も、彼自身も、謎ではな
るにもか、底が見えてわたりまうてゐる。

藝術の存在する余地はなくなるゝてゐる。

・ 謎は、消滅したのではなく、どこかに隠れてゐる。

その所在をたしかめ、これを解明する、ことには、
日本人としての未来に、一歩も踏み出し得ない
謎を失ふといふことは未来を失ふことである。

・ 日本人の内部に巣くふ封建性や封建的
なものの形式に對し、説明し、歴史的必然性の
うしろの位面をついて、解決したとするのは、
これと、すうかうかくと、なにかの意思があつて、はじめて
それか、謎として存在するのだ。
解決への意思が、自己の障礙となつて、意思が
作品のうしろの結晶させる、謎、その結晶度の
小説の魅力である。

「謎」とは文脈上、どのような意味なのか。

- ・自然科学においては、科学的に解明するべき、不明点
- ・文学においては、魂を鼓舞するに足る何物か

自己内面の不可測なるもの

封建性を内蔵せる生命力

芭蕉の発見した自然・日本人のみが発見した自然

「牙えるやうに新しい」

この表現の中に「文学における「謎」とどうへ得た陰の
驚き、たまに感、はきみむるど、生の上書きに連なる
感動が込められてゐる。近代の日本人はヨーロッパ人が
経験した「謎の喪失」の真の意味もどうへ得た陰の
固執したものとなる。日本人像ものへりしものなるうて
しまひ、過去と連続した生きた肉体を失った
このやうな状況から、「牙」えるやうに新しい小説は
出てこない。
観念や現象の固定化とは、近代化適応の困難な現象で
あり、それと「牙」つきてゐることを、表わされてゐる。